

4971 **メック**

前田 和夫 (マエダ カズオ)

メック株式会社社長

薬品の売上高、出荷量が増加し、増収増益を達成

◆2017年12月期第2四半期のトピックス

為替は想定レートより円安に進捗した。米ドルは想定レート 110.00 円に対して実勢レート 112.72 円(前年同期 113.03 円)、台湾ドルは 3.41 円に対して 3.66 円(同 3.45 円)であった。為替の影響は、売上高で前年同期比 100 万円減、営業利益では 43 百万円増となった。

薬品の売上高は前年同期比 19.6%増、出荷量は 18.1%増となった。

また、通期業績予想を修正し、期末配当予想を 1 株当たり 12 円(修正前 10 円)、年間配当 22 円(同 20 円)としている。

当四半期業績は売上高 52 億 39 百万円(前年同期比 15.9%増)、営業利益 13 億 15 百万円(同 28.8%増)、経常利益 13 億 43 百万円(同 39.2%増)、四半期純利益 10 億 28 百万円(同 26.5%増)となった。

薬品売上高は 51 億 27 百万円で、売上高に占める割合は 97.9%(前年同期比 3.1 ポイント増)となった。当四半期は国内の健闘により、海外売上高比率は 52.0%と微減した。CZ シリーズの売上高は 25 億 13 百万円で、薬品売上高に占める割合は 49.0%(同 4.3%減)となっている。

粗利率は 65.6%(同 0.4 ポイント増)となった。尼崎事業所への投資など、経費は増加傾向にあることから、粗利の減少を予想していたが、売上高、出荷量の増加により、これまでの水準をキープすることができた。

◆2017年12月期第2四半期決算の概要

常務執行役員管理本部長 北村 伸二

売上高は 52 億 39 百万円(前年同期比 7 億 19 百万円増)となり、修正計画に対しても 1 億 39 百万円の増収となった。内訳は、薬品 51 億 27 百万円(同 8 億 41 百万円増)、機械 47 百万円(同 1 百万円減)、資材 57 百万円(同 1 億 14 百万円減)である。

営業利益は 13 億 15 百万円(前年同期比 2 億 94 百万円増)となり、修正計画を 3 億 15 百万円上回った。経常利益は 13 億 43 百万円(同 3 億 78 百万円増)となり、修正計画に対し 2 億 93 百万円の増益、四半期純利益は 10 億 28 百万円(同 2 億 15 百万円増)となり、修正計画に対して 2 億 78 百万円の増益という結果である。

連結貸借対照表を見ると、流動資産については、受取手形および売掛金が、国内での売上増加により前期末から 4 億 28 百万円増加し 32 億 12 百万円となった。その他が 2 億 36 百万円減少したのは、尼崎事業所建設に伴う消費税額と売上に掛かる消費税額の差額の還付によるものである。固定資産では、有形固定資産の建設仮勘定が、ヨーロッパの新社屋が完成したことにより 68 百万円減少し、投資その他の資産で、投資有価証券が時価上昇により 68 百万円増加している。

負債については、短期借入金が、タイ子会社設立資金と運転資金の借入により 3 億円となった。1 年内返済予定の長期借入金は 5 億円、固定負債の長期借入金は 10 億円となった。尼崎事業所の建設資金として 20 億円を借り入れ、うち 5 億円を返済している。

結果、負債・純資産合計は185億57百万円(前期末比5億63百万円増)となった。純資産は139億45百万円(同8億35百万円増)、自己資本比率は75.2%となっている。

四半期推移を見ると、売上高は前年同期から右肩上がりとなっている。営業利益も大幅に改善した。出荷数量が増加し、粗利率が落ち込まなかったことが大きい。経常利益は、為替損の減少により、前年同期に比べ大きく伸びている。四半期純利益は、特別利益の増加もあって順調に増加している。

品種別四半期推移については、薬品、機械、資材、その他のうち、薬品の比率が圧倒的に増加しており、売上は四半期単位で初めて27億円を上回ることができた。薬品別四半期推移では、銅表面処理剤の売上が堅調に伸長している。出荷数量では、密着向上剤が増加したが、これは自動車関係で使われるCZ8100の伸び(前年同期比45.7%増)が主な要因である。

地域セグメント別売上高推移と海外比率については、日本とアジアが前年同期と比べると大幅に伸長し、ヨーロッパは減少した。

なお、今期より決算期を3月31日から12月31日に変更する。今期の対象期間は日本が9カ月(4月1日から12月31日)、海外子会社は12カ月(1月1日から12月31日)となる。

2017年12月期の連結業績予想は、売上高92億円、営業利益19億円、経常利益19億50百万円、当期純利益14億円である。

◆今後の事業展開

代表取締役社長 前田 和夫

IoT関連市場は近年急速に成長しており、デバイス類やビッグデータのデータ集積・分析用サーバ、各種センサーの需要が高まっている。AIの進化、5Gへの切り換えにより、当社の活躍できる分野は、今後ますます拡大するものと予想している。

現在、一番の稼ぎ頭はスマートフォン向けで、売上の約5割近くを占めている。次に自動車向けが2割強、テレビ向けとPC・サーバー向けがそれぞれ約1割という構成である。当社のコア技術は、配線を形成する技術、表面を粗化して物理的に密着性を向上させる技術、選択エッチング(金属が混在している場合に特定の金属だけをエッチングする)という技術の三つである。そして、現在、開発面で最も注力しているのが、表面を化学的に処理して密着性を向上させる技術であり、これについてはようやく量産が立ち上がったところである。

今後、移動通信システムが5Gに切り換わると、高速、大容量、低遅延が求められ、それを実現する技術としてEXEシリーズ、UTシリーズなどがかわってくる。iPhoneでは、CZシリーズ、EXEシリーズ、Vボンドなどが採用され、スマートフォンの高性能化、高密度化に寄与している。自動車のADAS基板には、その高い信頼性のためにCZシリーズが採用される機会が増加している。

CZ8101は、銅をソフトエッチングすることで表面に超微細な独特の凹凸形状をつくり、樹脂との密着強度を飛躍的に向上させることを可能にした。進化形の8201も既に市場に投入している。UTシリーズは、フレキシブル基板などに使われる圧延銅箔の表面を粗化し、樹脂との高い密着性を実現する。今後は、リジッド基板、MSAPへの採用が期待される。Vボンドは、比較的汎用的でありながら付加価値な基板の内装処理に使われている。高密度配線パターンを実現するEXEシリーズは、COF(Chip On Film)に広く採用されている。添加剤タイプで従来の設備を利用できるので、スイッチングコストが安く済む。

高周波の場合、金属表面が凹凸形状では遅延が発生するため真っ平らでなくてはならない。フラット処理は5G化に求められる技術であり、研究開発に注力している分野である。フラットボンドは、表面に凹凸形状をつくることなく、CZシリーズと同等な密着強度を持つ。

アマルファは、化学エッチングにより樹脂と金属を直接接合させる、当社独自の金属表面処理技術で、携帯端末の金属筐体を製造する工程で使用されている。

これまで研究開発に投資してきたものが、ようやく求められる時代になった。さらに、研究開発力、マーケティング力を高め、金属接合関連分野、ディスプレイ関連分野のみならず、新たな分野でも商機を見いだしていきたい。

◆ 質 疑 応 答 ◆

第 2 四半期は売上高の増加以上に営業利益の伸び幅が大きい。要因を教えてください。

売上、物量が増えた中で全体を精査した結果である。薬剤が伸びて売上のミックスに変化があったことなども含め、幾つかの要因が絡み合って利益の伸びが大きくなった。

薬剤では何が伸びたのか。

CZ である。選択エッチング剤も伸びたが、それほど大きくはなく、今後に期待している。

来期の設備投資と研究開発費について聞きたい。

設備については大きな計画はない。研究開発では機械などを入れるため減価償却費が多少増える。

来期の減価償却費はどのくらい増えるのか。

50 百万円程度と予想している。

OLED が主流となったときに伸びる製品は何か。

OLED ではタッチパネルがアウトセルになるので、選択エッチングが増える。また、基板は電池を大きくするため更に高密度となることから、CZ や UT も期待できる。

MSAP では歩留まりに苦戦しているメーカーが多いという。どのような状況か。

顧客の歩留まりについてはわからない。ただ、UT は配線パターンを形成するために使われるのだが、細い配線をアディティブ法でつくろうと思うと非常に難しいし、そういったところの引き合いが多くあることから簡単ではないことがわかる。我々にとってはビジネスチャンスである。

(平成 29 年 11 月 6 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見ることができます。

<http://www.mec-co.com/ir/library/>